特集

自公連立20年――
創価・公明の罪と罰

連載／「公明党と創価学会」を考える（第1回）

亡国路線を歩む「創価・公明」政界進出の淵源

平野貞夫
元参議院議員

「自公連立20年」を特集するので、『フォーラム21』で執筆するよう要請を受け、編集部から10数冊の既刊本が届いた。その中に2005（平成17）年8月刊行の「通巻83号」があった。そこには「特集『公明党指南役』が書いた創価学会本の意味」とのテーマで、私へのインタビューと論評が掲載されていた。

14年ぶりに読み直し、私の公明党と創価学会の関わりが、現在の日本政治劣化の遠因の一つだと、反省と懺悔を改めて感じている。しかし、事態は亡国への軌道を走る新幹線の動きである。現在の創価学会や公明党が亡国路線を進めている状況を、検証してみたい。

信仰や宗教への私の考え

高知県の南西地域、旧幡多郡が私の故郷である。足摺岬・四万十川・宿毛湾という日本列島の最果てだ。黒潮が直岸するところで古くから不思議な信仰現象がある地域だ。民俗学者の柳田国男が『海上の道』で、海洋縄文人が最初に日本列島に着岸したと記している場所だ。私が中学生の頃まで「アニミズム」が残っていた。

この地域は、原始神道から始まり仏教・キリスト教など信仰について、幅広く人々が受け入れる素地があった。私の実家は「浄土宗」だが、地域の風土は空海の真言宗で、大阪で事業に成功した親族が熱心な日蓮宗の布教をしていた。地域には「浄土真宗」の信者も多かった。

父が開業医で家の隣が、奈良時代から続くといわれる香佛寺であった。子供の頃の私は悪戯がひどく、村の人々を困らせる毎日で、親族会議で香佛寺の小僧にする相談をしたこともある。私が変わったのは昭和20年8月15日の敗戦の日からであった。

「終戦の詔勅」をラジオで親族と共に聴いた後、カルチャーショックを起こした父が私に「これから学校で成績を競争して、有名校に入って出世しようと思うな。般若心経を一緒に勉強しよう。俳句を教えてやる。この二つをやっておけば、悪人になることはない」と言われた。それから香佛寺の百歳近い老僧から父と1カ月に2回ぐらい、般若心経の話を聴いた。

80歳を過ぎた現在、私の信仰に対する心境は、故郷の原始アニミズムや原始アナーキズムを原点に「人間にとって信仰は絶対に必要なものだ」と確信、強い関心をもっている。日本人の政治意識の原点を知るため、縄文時代からと思える古神道。ジョン万次郎が米国で学んだ「ユニテリアン信仰」（原始キリスト教）などは大事な信仰だと思う。

最近は坂本龍馬研究から、妙見星信仰に興味を持っている。そこから聖徳太子や日蓮聖人の「法華経」を学んでいる。元創価学会幹部の友人から『思想としての法華経』（植木雅俊著）を薦められ、原始仏教の思想を知った。総括して言えることは、「何故人間は『万教同根』という思想を持てないか」の思いだ。

信仰が宗教団体という組織化するとさまざまな問題を起こしてきた。信仰が宗教となると自己拡大を目的として排他的となる。人類の歴史における戦争の大半は、宗教組織が政治権力化したり、それに利用されることによる。そして信仰の本質を放棄していく。その結果、消滅したり形骸化していく。

これが私の「信仰・宗教観」であり、この観点から「創価学会と公明党」について論じてみたい。

衆院事務局で知った創価学会と公明党

創価学会を支援母体とする公明党が結成されたのが、昭和39年11月17日、東京オリンピックが終わった直後だった。創価学会が政界に進出した最初は、第3回統一地方選挙（昭和30年4月）で、首都圏の自治体合せて53議席を得た。国政選挙への最初は第4回参院選挙（昭和31年7月）で、3議席を獲得して話題となった。

私は衆院事務局に勤務するようになった昭和34年10

月まで、創価学会について何も知らなかった。積極的な折伏活動で知られていたが、学生時代に折伏されたことはなかった。宗教団体の創価学会が政界進出するなら、憲法を護ることが条件と思っていた。この時期、岸信介自民党政権は「日米安保条約改正」に、政治生命を賭けるという緊迫した政局であった。衆院事務局の委員部第一課というのが職場で、安保国会の「日米安保条約」を審議する特別委員会が設置され、それを担当するところで、多忙を極めていた。

この職場に創価学会員が一人いた。当時はコピー機が未開発で、資料作成の主力は「ガリ板」による筆耕であった。この専門技術職だった。当時、創価学会員の折伏活動が社会問題となっていて、一般職員とのぎこちなさがあった。話し相手が私ぐらいで悩みを打ちあけてきた。学会員の日常活動などの話を聞いた。彼は他の新興宗教の活動との異質性を感じてか、政界への進出を按じていた。

安保国会の翌1961年（昭和36年11月）に、政治団体として「公明政治連盟」がつくられた。この時期、創価学会は衆院に進出するかどうかが話題となった。5年前の1956年に参院に進出して、参院全国区が広く国民の意見を反映させる役割から宗教団体の支援者が当選してくることは、従前からあり特に問題になることではなかった。

それが政治団体として、地方議員を増大させたうえで積極的に政治活動をすることになると、永田町では徒事（ただごと）ではない。参院事務局では問題なく過ごしているものの、政権をめぐる政治闘争の場「衆院」ではそうもいくまいと。事務局内で話題となった。その頃、創価学会・池田大作会長が「衆院への進出はない」と公言した。事務局の大勢は安堵したが、私だけが「絶対に衆院に進出する」と言い続けていた。

1963（昭和38）年の統一地方選での東京都議会議員選挙では、「公明政治連盟」は17議席を獲得した。地方選挙とはいえ、1955年につくられた「自公55年体制」の腐敗政治へ、国民が反発していることを予感させるものであった。そんな状況のなか、1964年11月に創価学会から「公明政治連盟」が切り離され、「公明党」が誕生した。衆院進出の準備が本格化することになる。

1965（昭和40）年から67（昭和42）年の3年間は、公明党が衆院に進出するに絶好の政治環境が生まれる。1965年は前年の東京オリンピック後の不況で、国民の生活が不安となる。国会では佐藤栄作自民党政権は、日韓基本条約等を憲法違反といわれる審議で強行採決で成立させた。国民の議会政治に対する不信が限界となる。さらに翌1966年は「黒い霧国会」といわれる闇僚や自民党幹部の汚職腐敗事件が続出し、国民の政治不信は頂点に達した。

社会・民社・共産の野党3党は、佐藤政権に解散を要求し、佐藤首相は「解散権は首相の専権事項」と応じない。11月30日に会期21日間で開かれた第53回臨時国会は、冒頭から紛糾し、野党が一度も審議に応じず、全てを自民党の単独審議という異常事態となった。佐藤首相は12月27日に召集した第54回通常国会の冒頭の召集日に衆院を解散した。

1967（昭和42）年1月29日に施行された衆院総選挙で、初めて進出した公明党は25人を当選させ、自社55年体制を揺るがせることになる。

この公明党の衆院進出を、常識論から言えば、「衆院への進出は行わない」との池田大作創価学会会長の公言は、国民を欺くものであった。本来なら批判されるべきものであった。ところが、そのことよりも国民の政治に対する不信は、創価学会への批判より公明党への政治浄化への期待が大きかったのが事実である。さらに前年、衆院議員定数が19人増員されたが大都市部であったことが、公明党を有利とした。公明党の衆院進出については、周到に準備されていたと言える。

公明党衆院進出時、私の職務が運命を決めた

人生とは不思議なもので、公明党が衆院進出時に私が園田直副議長秘書でなければ、公明党は現在のように、「自公連立政権」を20年も続けたかどうかわからない。政治状況がどうなったか読めない。私にとって運命的なものを感じている。

実は、1965（昭和40）年の日韓国会の混乱で、衆院議長と副議長が責任をとって辞職し、後任に山口喜久一郎議長・園田直副議長が就任する。山口議長は老齢で、園田副議長が佐藤首相の指示で国会運営を全て仕切っていくことになる。その秘書役が私だ。

佐藤政権は前年の「黒い霧国会」を乗り切り、総選挙でどうにか過半数を得たものの、まったく新しい25人の公明党の進出に苦慮し、公明党対策が政局の最大問題となる。

［続く］